

シンポジウム開催にあたって

横山 博

皆さん、こんにちは。今日のシンポジウムにこれだけたくさんの方に来ていただいて、本当に心から感謝いたします。先ほど杉村学長のお話にございましたように、七月一日に河合隼雄先生が亡くなられました。こういう非常に厳しい状況の中、今日のシンポジウムに駆けつけてくださった河合俊雄先生に深い敬意を表するとともに、ずっとわれわれの導きの星であった河合隼雄先生を喪ってしまったことについて、心から、ご家族の皆さま、河合先生ご本人に哀悼の意をこの場で表明したいと思います。河合先生は、ずっと私たちとともに歩んできてくれました。そして、河合先生亡き後、初めて公開の場でシンポジウムを持てるのもこれは何かの縁（まぎ）ではないかと考えております。

本題に入っていきたいと思えます。企画書に書きましたように、どうも世の中は不安に満ちております。そして、上から決めつけたような物言いをする変な形での「スピリチュアリズム」が世間に横行しています。また、日本において、「美しい国」などという全く実体のない概念が作り出され、ナショナリズム的風潮の再建のようなものが進んでおります。

そういう中でわれわれが心の問題をどう扱っていくのか、スピリチュアルな問題をどう扱っていくのかということにつきまして、私は大変な危機感を持っております。

今日のテーマは「心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって」です。確かに心理療法の中には科学的なものもあるけれども、やはり科学を超えた何かがあるのではないかと。ささやかながら、その力を明らかにしていくことがわれわれの仕事ではないかという意味から、このシンポジウムを企画いたしました。

表題の中の「神話的時間」とは哲学者の鶴見俊輔さんの言葉ですが、彼は以下のように書いております。「(一歳の子どもにとつて)『歩く』『話す』『眠る』『駆ける』、そういうことが全部ものすごく愉快に感じられる状態があるらしい。ことごとく一歳の子どもにとつて新しいわけですね。それはすべて新しく愉快で心躍る体験です。それが『神話的時間』です。そのことを理解できるようになったときに、親もまた神話的時間にもどつてそれを共有する、それが重大なことです」(「神話的時間」、熊本子ども本研究会、一九九五年、一八頁)。さらに、「零歳の子どもに話し掛けるとき、零歳の子どもが自分に向かつて話し掛けるとき。その中に我々は神話的時間を生きることができる。そのことに文学を読み解く鍵がある。おそらくは聖書を読む、お経を読むときの鍵がここにあるのだらうと思う」(同書、一四頁)、とあります。

彼はクロノロジカル(年代順)に流れる時間を「近代的時間」と呼びます。これに対して、クロノロジカルに規定され

ない時間をこのように記述して、それを「神話的時間」と呼んでいるのです。

この「神話的時間」が心理療法といかに関係するのかという点については、簡単に事例を通じて報告したいと思います。仮名をM子としますが、ボーダーライン（境界性人格障害）、それと摂食障害のあるクライエントです。彼女との心理療法における超越性ということについてお話しいたします。

まず来談経緯について述べます。X年五月二日より某国立病院に入院していましたが、そちらでは過食のコントロールができませんでした。六月二六日にはリストカットイングをしたために転院を言い渡され、同年七月一五日より私の勤務先の病院に入院します。初診時は二二歳、そのときの臨床所見は過食症でした。

次に、現症歴です。

過食が始まったのは高校二年時からで、体重が四三kgから五六kgとなります。高校三年時にリストカットイングで自殺を図りますが、傷は深いものではありません。大学一回生時、抗不安薬二〇〇錠を服薬して、両踵部に褥創をつくります。このあとそのままイギリスに留学するんですが、帰国後、肥満して閉じこもる生活になります。X年一月、某国立病院に入院し、摂食障害の治療を受けます。同年三月二日に退院、復学に備えますが、三月二三日妊娠がわかり、中絶します。そこからまた過食となり、もう一度同院に入院します。そのあとリストカットで自殺未遂をしたことで、私の勤務先の病院へ転院となったわけです。

治療の最初の時点で、原因として自分で何か思い当るところはあるのかと聞いても、「よくわからない。勉強はついていけない面はある。両親の夫婦仲が悪く、家を飛び出したこと。女性であることは嫌、男ならこんな病気はない。恋人はいない。中絶について今は答えたくない。リストカットイングは、手首を切ると思うとわくわくしてくる」と答えます。

臨床診断としては、摂食障害の過食傾向と抑うつ、離人症傾向、加えて境界性人格障害の可能性がある、と考えました。baumテストをするんですが、樹冠と幹のみで極めて貧しいものです。入院後も、過食、嘔吐、拒食の繰り返しで、入院一〇日目には病院近くの海へ飛び込みます。海の中でテトラポッドにつながって寝ているのを釣り人に発見されて、奇跡的に助かりました。その後も自殺企図、大量服薬をしょっちゅう繰り返します。これはまさに死の航行ですね。

主治医の週二〜三回の面接、週一回の臨床心理士（カウンセラー・女性）の面接枠を設定して、治療を始めます。気分障害、つまり軽躁、多動、抑うつ、の繰り返しで、希死念慮は最初は非常に強くありました。

彼女にはニンフォマニアック nymphomaniac な目まぐるしい異性関係および売春により、二七名以上の男性遍歴があります。最初に登場するのは、四年前に予備校のとき知り合い、その後専門学校を卒業して旅行社に勤めていたM1以下交際相手の男性をMと番号で表記でした。M1とは二年前から性的関係があったのですが、避妊はしていませんでした。X年三月二九日誰にも告げず中絶します。M1とは別れますが、

別れたのはそのためでなく、太ったから、とのことでした。私との心理療法は夢分析を中心にいこうということ、夢を見たら報告するように本人に言いました。

夢1..びくがいつぱいになっている。

— M子の連想として、「好きでもなんでもない。いい景色だな」。これは夢を分析する私の目からみれば、もういつぱいいつぱいだなという感じですよ。

夢2..私と母とおばさん(母の妹)で韓国に行く。スーパーで買い物をしている。母は衣紋掛けを買っている。おばさんは、私が何かよいことをしたので、地球儀型のランプを買ってくれる。それが六万ウォンだった。母はこんな高いものはいらないという。私は「四分の一だから、一万五〇〇〇円くらいだから」と母を説得する。何個もある中から一個買うが、あまりに派手だから後悔している。

— M子の連想として、「おばはかわいがってくれる。母にもこんなところがある」ということで、ここにおおさんと微妙なずれが現れています。

この夢には彼女の母親が登場しますが、この時期M子が語った彼女の成育歴の概略は以下のようなものでした。

幼稚園ではわんぱくな明るい子で、婦人警官になりたかったそうです。

小学校では内向的になります。小四までしゃべることな

い子で、しゃべろうとすると泣きそうになりました。小二の頃も母がいないと不安で、母がいらないとおかしくなったかのように泣き、いないと寝つけませんでした。四年生になってバドミントンクラブの先生が明るい面を引き出してくれましたが、それまでは給食も食べませんでした。

中学校では、楽しく元気な子になります。成績はよく、クラスから一人しかいけないN高校に入りました。中二の時、父親が退職するのですが、それから父母のけんかが増え、それが嫌で家を飛び出し、いとこの家から通学したこともあり、一方でこの頃、父母の性行為、性的な雰囲気に対し、嫌で汚らしかつた、と感じます。高三までは母親ともあまり口をききませんでした。反抗期は、中一から高二までと長かったようです。

これはお母さんからの情報ですが、夫はM子が中二のときに仕事を辞め、三年間ほどぶらぶらした後再就職して、八年間働いたそうです。母親は股関節に障害があり、三回手術を受けていますが、軽度の歩行障害がある人でした。

次は、X十二年一月、一二月です。この頃、M1とのこととで迷い、周りも相当に巻き込まれます。

夢18..私は白のワンピースを着ている。それでM1の車に乗っている。途中で生理になってしまう。なぜかパンツを履いていない。白い服なので染みてしまうと、足を上げて乗っている。M1の友達と会ってその車に乗るが、そ

れが爆発し、ぼーっと見つめている。燃え上がる。

——これは、結婚に対するアンビバレンスだと彼女は言っています。彼女は自分のフィアンセである男性（M11）からレイプされた経験があるので、これはその男と彼女の友達の結婚式の頃の夢です。この頃はアンチシンデレラ・コンプレックスが強くなつたと彼女は言います。これ以上細かいことは申しませんが、これは非常に悲惨な形で女性の身体的、性的側面が肥大化した状態の夢です。

夢19…過去のいろんな男の人が出てくる。自分と同じ私大へ行った同級生の男が死んで葬式に出ているが、でもその子が夢に出てきて楽しく遊んでいる。恐竜が出てきて火を噴いている。

——もうほとんどあの世の世界の夢であります。

夢20…親子三人で旅行。小学校一〜二年生。お風呂で銀の塊で父親を殴り殺す。家に帰ってからお母さんが、私が父親を殺したのに気づく。どういう方法でお母さんも殺してしまう。そこでカウンセラーの先生が出てきて、大きなマンションに住んでいる。一番屋上の天井がガラス張りであるところ。一時間七〇〇円でカウンセリングしてあげるといふ。先生は両親を殺したことを知っているのに、ちっとも恐れていない。先生のベッドの横にみなしごハッチの縫いぐるみがある。その後、マンションのエレベーターの中

でM13と猛烈なキスをしている。

——これは本当にすさまじい夢だと思います。父母へのすさまじい攻撃性とカウンセラーの守りが現れていますが、まだまだしかし遠いなという感じがします。おそらくこのときにはカウンセラーとの投影性同一視が起こっているのだらうと私は思っています。「今は父親が好きなのにどうして」と本人は言っています。M13とは薬剤師の試験を受けるために勉強中だった男性で、数ヶ月付き合ってたんです。

夢21…四人の人を殺す。一人は知っているが、ほかは知らない。ビニール袋に死体を入れて雪の中に埋める。高校のときの男友達とその死体を見つけ、刑務所に入る。

——すさまじい攻撃性の夢です。

夢22…赤ちゃんを殺す。ナイフで刺して、それで川に。その川とは、日本で一番きれいな川で、それで動揺している。

——これもすごい攻撃性ですね。

この頃から彼女は少し変わってきて、X十四年一〇月に私に手紙を書いてきます。

「何かで読んだことがあった。ある死刑囚が、死の一時間まえに、どこか高い絶壁の上で、しかも二本の足をおくのがやつとのようなせまい場所で、生きなければならな

いとしたらどうだろう、と語ったか考えたかしたという話だ、——まわりは深淵、大洋、永遠の闇、永遠の孤独、そして永遠の嵐、——そして猫の額ほどの土地に立ったまま、生涯を送る、いや千年も万年も、永遠に立ちつづけていなくてはならないとしたら、——それでもいま死ぬよりは、そうして生きているほうがましだ！ 生きていさえすれば、生きたい、生きていたい！ どんな生き方でもいい、——生きてさえいられたら！……なんという真実だろう！ これこそたしかに真実の叫びだ！ 人間なんて卑劣なものさ！ その男をそのために卑劣漢よばわりするやつだって、やつぱり卑劣漢なのだ。」

〔罪と罰、工藤精一郎訳、新潮文庫、上巻二七四―二七五頁〕

これは『罪と罰』の中で、ラスコーリニコフが老婆を殺したあとの言葉だと思われます。長い手紙の中でこのように書いて、主治医に生きていく方向を示します。

X十八年末に知り合ったM24と翌年四月に結婚し、中部地方で生活し始めました。しかし、夫は酒浸りで性関係も持たず、「結局自分は彼にとってごはんを作るロリータでしかなかった」、と語ります。

X十九年一月にM24と慰謝料八〇〇万で離婚し、実家とは別にマンションを借りて生活を始めます。この結婚生活と父母との別居で、新たな生活が始まります。離婚してしまつて本当によかつただろうかと不安定になることが一時期あり、

被害的妄想気分が出現しましたが、服薬によつて安定し、居酒屋のアルバイトでおおむね自立した生活を続けます。

X十一一年一月、不眠と抑うつが続きます。長く勤めていた居酒屋を一二月で辞め、別の居酒屋で働き始めますが、その職場の男性(M26)が彼女のマンションに転がり込んできて同棲します。しばらくで抑うつが解消し、居酒屋のアルバイトで自立した生活が続きます。

X十一一年一月、不眠・抑うつがひどく、抗精神病薬、抗うつ薬を使います。三月、四二歳で未婚のM27とお見合いで知り合います。真面目で優しい人柄で、国家公務員でした。五月から同居を始め、六月には入籍、新婚旅行でオーストラリアへ行きます。その後二ヶ月は自分のマンションで生活していましたが、八月より夫と同居するようになり、よく眠れるようになります。夫は勤め先の関係で金、土、日だけ帰ってきました。M子自身は喫茶店のアルバイトで週五日働き、精神的には安定し二週間に一度病院に薬を取りに来るとい生活を送ります。

X十一一年一〇月に父親が死亡します。動揺なく、すつきりした、とのことでした。

このような経過をたどる人です。彼女は、目まぐるしい男性関係で何を求めていたのか。私は次のようなことを見ます。

(1) 見捨てられ不安から性を通してニンフォマニアとして他者とつながる——これはM子が高校時代から身につけて

- きた、生きる手段であったのだろう。
- (2) このような姿は、父親による倒錯的な少女Ⅱ娘元型的なイメージへの閉じ込めであって、近親相姦的な匂いを禁じ得ない。
- (3) 失意の思春期とニシフォマニアックなつながりの発見。高校時代にこういう感情を身につけていく。
- (4) ラスコリーニコフの恐怖に至る思いは、前後の夢、転移とあわせて、ある種の超越ではないか。
- (5) このころ私は、「二応精神科医、心理療法家という形でこの日常世界につながりつつ、結果的に生を選んでいる治療者が、症状として象徴的に何かを表現することによってようやくこの世につながっている存在に、面接場面という非日常の中で、言葉、イメージを通していかにかにつきあいられるかが共感の内実である」(「共感と解釈—ユング心理学の立場から」)と論文の中で述べている。結果的に生きていくことを選んだM子の決意は、そこで書いたことと同じあり、不思議な同時性が感じられる。
- (6) 異性を渡り歩くこと、それは性的快感を求めてではなく、満たされることのあり得ない空虚感、人間の根源的な融合的体験、存在の本質を求めての行為ではなかったか。それがあり得ないことを、男性遍歴を通して知っていく過程であったとすると、それはあきらめか、あるいは超越と言うのか。あるいは無意識から生の方向、集合的意識性の基礎である神話的時間への流れなのか(このあたりを、シンポジウムでの討論の課題にしていたきた

- い)。
- (7) 主治医への転移、カウンセラーへの転移も含めて、コンティナーとしての役割。精神科医・臨床心理士の相互関係がヘルメスの容器として機能したのではないか。

私はこのように、彼女を理解します。特に境界性人格障害を理解するときに、超越的なものというか、第三のものというか、そういうものを考えずには、なかなか治療が求めにくい。では、そういうときの超越とはいったい何なのかということについて、今日のシンポジウムの先生方に、それぞれいろいろな側面から光を当てていっていただきたいと思えます。以上です。よろしくお願いいたします。

※本事例は論文として、甲南大学人間科学研究所叢書『心の危機と臨床の知10 心理療法と超越性——神話的時間と宗教性をめぐって』に収められている。